

・・・ 創立から新潟県立高田商工学校移管まで ・・・

◆高まる実業教育への要請

幕末、頸城地方にあった高田藩(榊原15万石)と糸魚川藩(松平1万石)は何れも江戸幕府譜代の大名が統治していた。慶応3年の大政奉還、朝廷による王政復古の号令から戊辰戦争を経て明治4年7月、新政府は廃藩置県を断行し260余年続いた江戸時代の封建制度は完全に崩壊した。高田藩は高田県、糸魚川藩は清崎県となり、同年11月には頸城地方全域が柏崎県に、更に明治6年には柏崎県と新潟県が合併して現在の新潟県となった。なお、明治11年には郡区町村編制法が施行され、頸城地方は東頸城郡、中頸城郡、西頸城郡の三郡に分けられた。

廃藩置県によってようやく中央集権的な統一国家の基礎を固めた新政府は、富国強兵・殖産興業のローガンのもと次々と各種改革を進めた。その中で人的資源養成から教育面で中等学校や農学校・水産学校などの実業学校が全国各地に誕生した。

高田商工学校は大正5年に設立された。この頃の我が国は、明治維新、日清・日露の両大戦を経て、明治における近代化の変革が一応その基礎を固め、発展・充実期として大正に引き継がれた頃である。そして、更なる国力の充実のためには商工業の発展こそが必要不可欠との考えが支配的になっていた。

こうした情勢を受けながら、中等教育の重要性から日清戦争後には「中学校令」「高等女学校令」と共に「実業学校令」(明治32年)が公布され、農業、工業、商業、水産などの実業学校が質・量ともに急激に増加した。

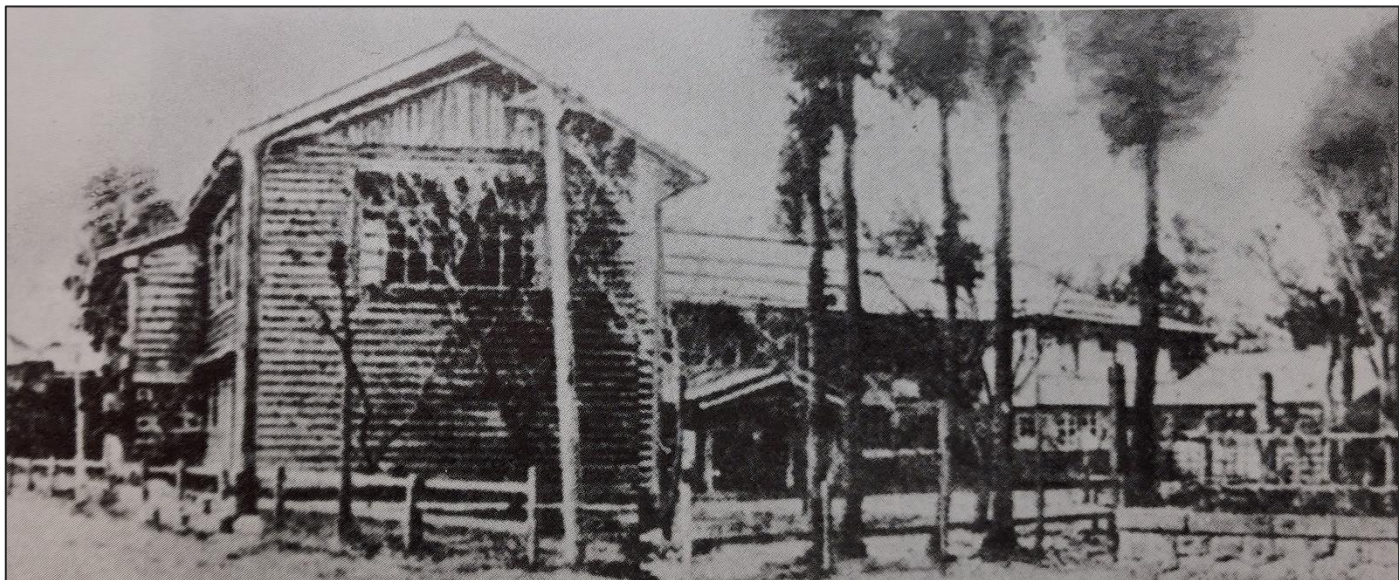
一方上越地域にあっては、かつての城下町が軍都へと変貌しただけでは抜本的活性化を図れず、地場産業の育成が切望されるに至った。そうした中で高田市の発展を願う有識者や議会議員は市の繁栄には商工業の発展とそれを担う人材の育成が必要不可欠との認識が深まり、大正5年3月末に高田市立商工学校の設立認可申請を文部省に提出した。

◆学校の創立

大正5年4月19日、文部省より商工学校設立認可通達が県に入り、県から電報が届いた。創立時の概要はおおよそ次のようなものであった。

学校は新潟県高田市立商工学校と称し、商業科・漆工科・家具(指物)科の3科を設置(尋6卒3年制乙種)。校舎は当分建築せず、高田市立図書館(高城村岡島町/現大手町)の北側棟続きの高田幼稚園の校舎部分(6月に移転済み)を使用し、工科の実習工場は新築するというものであった。その後、定員拡充や授業内容の充実を図るため、3回にわたって校舎を増築した。

また、校長は高田市長 倉石源造氏が兼務する形での生徒募集となったが、予想を超える志願者で総計134名にもなった。商科1年の応募が定員を超えたため、選抜試験の是非を論ずることになったが、結局全員を入学させることとなった。5月9日、入学式および授業開始の運びとなり、6月15日には開校式を済ませ、とにかく学校としての営みが始まった。



大正5年 高田商工学校創立時の高田市立図書館（高城村岡島町26番地／現大手町）
 大正5年 図書館北側棟続きの高田幼稚園校舎部分(幼稚園は大手町尋常小学校西隣に新築移転)に入居

高田図書館は、開館当初の施設は元々明治11年に高城村岡島町(現大手町十字路東側駐車場付近)に新築された高田中学校(現高田高校)の校舎の一部であった。同年9月の明治天皇の北陸巡幸では中学校の使用前であったため、行在(あんざい)所として使用された。

明治31年、同校が現在地に移転後、36年に町村組合立高等小学校、38年に私立の家政女学校の校舎として使用された。40年の藩祖榊原康政の300年記念に「県立榊神社300年祭記念高田図書館」として認められ、41年に開館した。44年に町立、続いて市立となった。

～中略～

明治45年4月に高田図書館と棟続きの北側の校舎に移転していた高田幼稚園は、大正5年(1916)6月に大手町尋常小学校の西隣に新築・移転した。大正5年4月には市立商工学校が設立され、それまで高田幼稚園が使用していた校舎に入ることになり、同年5月9日に入学式を挙行している。尚商工学校では定員拡充や授業内容充実を図るため3回にわたって校舎を増築した。

出典…高田図書館110年の歩み



「明治天皇高田行在所」石碑



旧高田図書館（高城村岡島町26番地／現大手町十字路東側駐車場）跡地

◆商工学校創立時の学科別募集定員と入学者数及び入学者出身地

科別	学年	定員	5/9 (入学時)	6/15 (開校時)	入学者 出身地	地区	人数	地区	人数
						商科	1年	40	54
2年	40	30	30	新道			10	他府県	3
3年	20	12	12	三郷			1	合計	134
家具科	1年	10	15	13		津有	4		
漆工科	1年	20	23	22		和田	2		
合計		130	134	130		東頸城	1		

※ 商科2・3年生は、高田地区外(直江津農商学校・新井農学校等)に通学していた生徒の編入学を想定

- ◆乙種商工学校設立要項◆
商業学校(抜粋)／実業学校令
- 一、修業年限三箇年以内トス
 - 二、就業時間数ハ毎週三十時間以内トス
 - 三、学科目ハ修身、読書、習字、作文、算術、地理、簿記、商業要項、体操トス、但本項科目ヲ設定加設スルコトヲ得
 - 四、乙種商業学校ニ入学スル者ノ資格ハ年令十年以上、学力修業年限四箇年ノ尋常小学校卒業以上ニ於テ之ヲ定ムベシ



初代校長 倉石 源造 (高田市長／兼任)



大正6年3月 乙種商科第1回卒業生

◆ 補習学校 ◆

明治維新後の新しい国家体制の確立や産業経済の発展、社会の安定化はさらに新しい成長を目指して中等教育、なかでも実業教育の重要性を高めることとなった。一方、地域社会においても実業教育の必要性が広く認識されるような背景事情が生じつつあった。

そのころ高田で尋常高等小学校を卒業した者の中で、家庭の事情から中学校へ進学できない者、引き続き勉学を希望する者のために、明治36年4月、第一小学校（現南本町小学校）と第二小学校（現東本町小学校）にそれぞれ第一、第二補習学校（夜間）を併設していた。これらの動きがさらに発展し、大正2年2月に従来の補習学校を一校に統合。これに工業部門を強化したものを加えて第三尋常小学校（現大町小学校）に併設、校名も「私立高田実業補習学校」（夜間）と変更した。

◆ 開校当時の教職員

職名	担任学科	氏名	本籍	給料
学校長	事務取扱・市長	倉石 源造	本県	無休
教諭	算術・要項・作文・修身・地理・法制・経済	小室 恂一	秋田県	不明
〃	図画・漆器製造法・実習	佐野 常栄	石川県	45円
〃	図画・製図・材料・工具取扱製作法・実習	駕ノ海 昇	大分県	38円
〃	修身・読書・要項・簿記	神谷藤四郎	本県	28円
助教諭	修身・読書・作文・習字・算術・地理・理科	大野子之助	本県	25円
嘱託	英語・法制	丸山 和七	本県	18円
〃	算術・読書・作文・理科・習字	岡 宗平	本県	13円
助手	家具科	小池幸司郎	本県	不明
〃	漆工科	高橋 庄作	長野県	不明
書記		内山 直躬	本県	9円50銭
学校医		合田 進	本県	不明

◆ 甲種五年制昇格 ◆

本校が創立した当時から、どういう生徒を作り上げるかという点では、「乙種本科三年ではまだまだ一人前の職人として未熟」という声があり、補習科が設けられていた。

従って、このような形の乙種学校よりも、甲種の五年制のほうがはるかに良い。また、進学する者は五年制が必要でもあった。

当時、市は義務教育充実のために、尋常小学校の建設問題などを抱えており、その頃としては珍しい「市立幼稚園」を持っていた。

さらに本校の運営も行い、市の財政に占める教育費は大きかった。事実、比率で見れば新潟市や長岡市をはるかに超えてもいた。

こんなことから、本校は学校の教育内容の充実を急ぎ、一日も早く市から離して県立となる必要もあった。

このような事情を背景に、甲種昇格への運動と内容の充実に努力を払われ、大正10年3月31日、待望の甲種に昇格し、五年制となった。従って補習科は廃止され、同時に家具科は木工科と改められた。

甲種昇格は、学校に与えた影響も大きかった。まず、いままでの和服は廃止され、5月13日から洋服となった。

運動も活気にあふれ、前年より高田の覇者となっていたスキー部は益々好調であり、野球部・庭球部と次第に充実、さらに剣道部も作られた。

◆ 新校舎建設 ◆

本校は、創立の当初から校舎の建設の必要性を感じながら、とりあえず岡島町の建物(旧市立図書館)を利用して開校したものである。その後校舎は3回にわたって増築され、やや広くなったが校庭はわずか250坪となり、体操の授業は時には神社社の境内で行われた。

市は所期の目的であった甲種昇格を果たし、次は県営移管にしようとして計画した。

しかし県では、この貧弱な施設では絶対に受け入れないことが分かった。そこで大正10年2月の市会に、当時の河島良温市長が校舎新築を提案した。それまでの借り物の校舎と貧弱な施設と無資格教員が多いことを一挙に解決するために新築移転し、後に図書館を置き、それもまた県に移管したいというのが市長の構想でもあった。

当時、工科の生徒製作品売却代が収入として予算に計上されていたが、河島市長は「これは徒弟学校のやり方だ」といって削り、市会では水道試験堀などで経費多端ではあったが、商工学校の新築案は可決された。

敷地は馬場先町(南城町3/現南城高校)に選定したが、市の北部方面では師団設置時の公約を破るものだとして不満の声が出た。だがその方面には適当な土地がなかった。敷地は将来、県への移管を円滑に運ぶため、当初予定の3千坪を5千坪に増やして確保した。

校舎の新築工事は大正11年7月30日に着工し、12月に竣工、12月24日雪の中を生徒が机や椅子を運んで移転、翌日に落成式を挙げた。この間、5ヶ月という極めて短期間の新築工事であった。



大正11(1922)年12月20日竣工 新校舎(馬場先町/南城町3、現南城高校)

<学 則>

第一条 本校ハ実業学校令ニ基キ、徒弟学校規定並ニ商業学校規定乙種程度ニ依リ、工業並ニ商業ニ従事セントスル者ニ須要ナル教育ヲナスヲ以テ目的トス。

第二条 本校ノ教科ハ商業、建築、家具、漆工ノ四科トシ、生徒ノ志望ニ依リソノ一ヲ専修セシム。
定員240名 商業科120 建築科30 家具科30 漆工科60

第十二条 入学志願者ハ当市在住者ヲ第一トシ、コレニ欠損アルトキハ他地方志願者を入学セシム。
(以下略)